

同志社女子大学オープンキャンパス2007イベント

愛華みれトークショー「あさきゆめみし」

—私にとっての源氏物語

2007年6月24日、オープンキャンパスと同時に開催のイベントとして、元宝塚歌劇団トップスターである愛華みれ氏を招き、同志社女子大学文学部日本語日本文学科 吉海直人教授とトークショーを開催した。

テーマは、「あさきゆめみし」—私にとっての源氏物語。宝塚歌劇の「源氏物語あさきゆめみし」で光源氏を演じた愛華氏と長年「源氏物語」を研究し続けている吉海教授の相互の視点から、時代を経て今なお人々を惹きつけてやまない「源氏物語」の魅力が語られた。

日本文学史上でも歴史に残る傑作である「源氏物語」は、明治時代以降、数多くの作家により現代訳されており、1979年には大和紀氏が「あさきゆめみし」として漫画化している。



それを2000年には宝塚歌劇団が上演。原作の持つ美しさを再現するだけ

にとどまらず、動きが困難な十二単などの衣裳の所作も忠実に描写し、華麗なる王朝絵巻を舞台化した。光源氏という人物を宝塚歌劇ならではの視点で織り込んで表現することにより、原作の世界観がさらに広がったことは、日本文化を大切に守っていくこととする意識を高めるきっかけにもなった。

愛華氏は、宝塚役作りの工夫や舞台裏での早着替えの様子など、宝塚歌劇団時代の裏話も披露。開演前にお香を焚き足元に香りを付けたり扇子の持ち方に気をつけたりと細部にまでこだわりの持ち演じていたというエピソードに、実際に舞台を鑑賞したことのある聴衆は改めて感嘆した様子であった。最後には、「来年で千年紀を迎える『源氏物語』を通じて、今日もこうして多くの人と出会えているという因果応報に感謝します」との愛華氏の言葉に拍手が送られた。

学生に加えて宝塚歌劇のファンの方々の来場もあり、トークショーに熱心に聴き入るとともに、活発な質疑応答も行われた。
(女子大学広報課)

法人と各学校にリスク管理本部を発足

学校法人同志社は「同志社リスク管理本部規程」を設けました。本規程は、学校法人同志社と法人内の各学校の教育研究と管理運営を阻害する事態の発生を未然に防ぐために、リスク（危機）管理を実践することを目的としています。

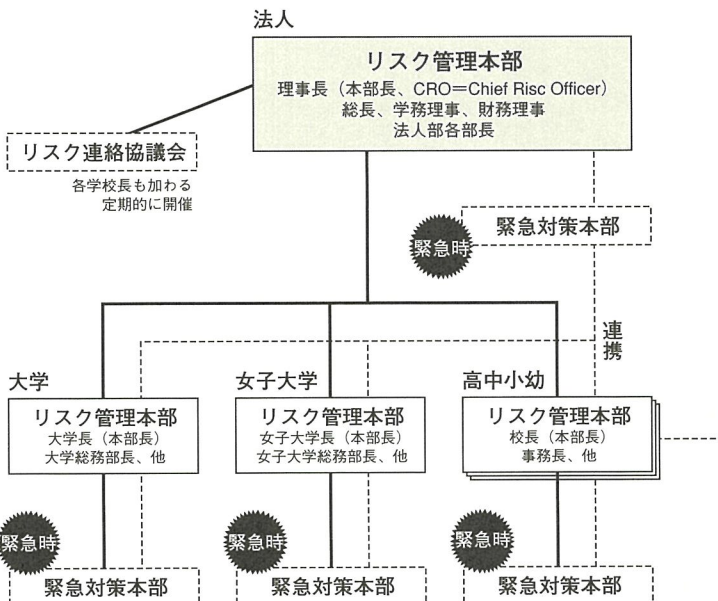
教職員と学生・生徒などで構成する学校法人には、教育・研究機関特有のリスクが潜在しています。

想定されるリスクを未然に防ぐ管理体制として、学校法人に「同志社リスク管理本部」を常設するとともに、各校にも「リスク管理本部」を置きました。

リスク管理本部では、リスクの予想・調査、リスク管理の計画・実施・点検評価、リスク管理意識の啓発など、リスクに関わるすべての任務を遂行することになっています。

平常時は、法人の本部構成員と各校の本部長らで組織するリスク管理連絡会を定期的に開催して、情報の収集、共有、啓蒙に努めます。

リスク発生時には、ただちに法人及び該当する学校に緊急対策本部を設置します。緊急事態では迅速かつ的確な判断が求められるので、緊急対策本部は、リスク管理本部の中心メンバーによる機動的な体制を敷き、各本部間で緊密な連携をとりながらリスクへの対処にあたります。



学校法人同志社 〈A A +〉の格付けを取得・維持

4年連続の高格付け

学校法人同志社は、(株) 格付投資情報センター(R&I) から、2004年以降4年連続で「A A + (ダブルAプラス) / 格付けの方向性・安定的」との高格付けを取得・維持しました。

5月14日に公表された「A A +」は、21段階ある格付けの中で上から2番目のランクで、学校法人でR&Iからのこのランクの格付けを取得しているのは、現時点で本校と慶応義塾、早稲田大学の3校のみです。なお、同ランクの企業には松下電器産業、キヤノン、NTTドコモ、関西電力、大阪ガス等の一流企業が名を連ねています(2007年7月現在)。

なお、格付けの取得・維持は、学外からの資金調達を目的としたものでは

なく、第3者機関による経営状況の客観的評価の一つとして行うことで、同志社に対する社会的信頼性を高めるとともに、その結果を今後の学園運営に生かすためです。

経営の安定性と ブランド力を評価

高格付け維持の主な理由として、次の3点が挙げられています。

第1は、130年の歴史と伝統に裏打ちされた総合力です。「1920年には関西地区で初めて大学令に基づいて大学に昇格するなど、日本の私立大学としては有数の歴史を誇る。良心教育、キリスト教主義、自由主義、国際主義といった建学の精神は現在の組織運営にも生きている」。

第2は、ブランド力です。「大学の

志願者は増加が続いており、入学難易度も関西の私立大学で最も高い水準を維持している」。また、女子大学についても「女子大学としては日本で第1位の志願者数を維持しており、2007年度は1万6000人を超えた。学芸学部国際教養学科を新設したが、学内での競合はなく新たな志願者層を呼び込むことができた」との評価を受けています。さらに、「大学では2008年度には生命医科学部とスポーツ健康科学部を新設する。学部の新設という広報の話題は2008年度の志願者確保に好影響を与えるであろう」。

第3は、経営の安定性です。

今後、中学校の岩倉校地移転、大学文系学部の今出川キャンパス移転などに関して「2010年度以降に100億円を超える規模の投資計画があるものの、財務構成が悪化する懸念は小さい」と評価しています。

以上を総合的に判断のうえ、今回の格付けとなりました。

「福祉の同志社」のきっかけを作るために 同志社女子中高の花の日施設訪問

政治の早稲田、経済の慶應、そして福祉の同志社と言われることがある。キリスト教主義を徳育の基本としている同志社にとって、こう呼ばれることは誇るべきことである。それは、同志社の先人がこの社会の「地の塩」「世の光」（マタイ4:13）として、社会の底辺で生きる隣人と共に歩んでこられた福祉実践の証ゆえでもある。そして、現代の福祉の分野に若者たちが目を向けるきっかけを作ることが、我々同志社に生きる者の使命であると確信している。ここに、同志社女子中高における、キリスト教主義教育の実践の一端を紹介する。

本校では、毎年6月に花の日礼拝を行っている。たくさんの花を栄光館チヤペルに飾り、色とりどりの花に囲まれて礼拝する。これらの花は、生徒たちが自主的に家から持ち寄ったものや、生徒と教職員から集めた献金で購

入している。多くの花に囲まれて礼拝すると、あらためて神様が私たちに与えてくださったっている恵みに感謝することが出来る。

その日の午後には、高校1年生全員がそれぞれ10人程度のグループに分かれて、教員と共に合計24か所の施設

（児童、障がいのある人、高齢者らの施設や病院など）を訪問させていただいている。生徒は自分たちで花束を作り、その花束を大切に施設に届ける。そして、その施設の働きを実際に学び、隣人と出会う中で福祉の大切さを実感し体験することが出来る。（11月には有志による施設訪問を行っている。）

私たちのすぐ傍に多くの隣人がおられる。そして、その隣人のところに実際に出去かけて行き、出会うことの大切さを教えているのが、イエス・キリストである。私たちが隣人と出会う機会を与えられていることに感謝するとともに、一人一人が福祉の分野に目を向けることが、キリストに繋がる私たちの使命である。

女子中学校・高等学校 宗教主任

平松 譲二

